フェレンツ・モルナール作『リリオム』の日本における受容史 -翻訳と演劇上演-

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: フォルゴー, テオドーラ マリア メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21805

２０２１年1月２０日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員　（主査）　文学部　専任教授
氏名　井戸田　総一郎　㊞
（副査）　文学部　専任教授
氏名　福　間　具　子　㊞
（副査）　東京大学名誉教授
氏名　田　尻　三千夫　㊞

１　論文提出者　フォルゴー　テオドーラ　マリア
FORGO TEODORA MARIA

２　論文題名　The Reception History of Ferenc Molnár's 'Liliom' in Japan
— Translations and theatre adaptations —

（日本語文題）　フェレンツ・モルナール作『リリオム』の日本における受容史
— 翻訳と演劇上演 —

３　論文の構成

1. Introduction - Molnár's life and works - Focusing on internationality and multimedia（国際性とマルチメディア性の観点から見たモルナールの生涯と作品）
2. Genealogy of reception history research regarding Molnár's works in Europe and America and the research status in Japan（欧米におけるモルナール受容史研究の系譜と日本の研究状況）
3. Methodology of reception history description（受容史記述の方法論）
4. Overview of the reception history of Molnár's works in Japan - Historical analysis of translations and theatre adaptations based on statistics（日本におけるモルナール受容史の概略—統計に基づく翻訳及び演劇上演の歴史的分析）
5. Japanese translation analysis of 'Liliom', based on paratext theory - Focusing on elements that form the peritext（パラテキスト理論に基づく『リリオム』の翻訳分析－ペリテキストを構成する要素を中心に）
6. Theatrical performances and movie adaptations of 'Liliom' in Japan（日本における『リリオム』の演劇・映画上演受容）

Excursus Translation of 'Liliom' by Manga Media（補填 『リリオム』翻訳と漫画メディア）
Illustrations（図版出典）
Bibliography（文献一覧）
Online sources（オンライン出典）

Appendix1　List of Japanese translations of Molnár's works　（附録１　日本におけるモルナール作品の翻訳リスト）
Appendix2　List of performances of Molnár's works in Japan　（附録２　日本における『リリオム』の上演リスト）

４　論文の概要

第１章では、ハンガリー語で書かれたフェレンツ・モルナールの作品が欧米においてドイツ語、英語及びフランス語に翻訳されることによって国際性を獲得していく経緯や、文字媒体ばかりでなく舞台や映画という多様なメディアを通じて広範に受容されていく様相が紹介されている。第２章では、欧米におけるモルナール受容を研究したエリザベス・ラジェック、ジョージ・ナジ、クラーラ・ジェルゲイの業績を紹介し、その受容の特質として、多様な書籍形態（文学書から児童書まで）と演劇・映画を含む複合メディア性を析出している。日本のモルナール研究としては、徳永康元、粂栄美子、深澤晴美の業績を紹介しながら、それらが欧米のモルナール受容の記述に比して十分とは言えない研究状況を明らかにしている。第３章では、翻訳を受容史の文脈で扱う場合の方法論として、アンソニー・ピムの翻訳史記述とジェラール・ジュネットのパラテキスト論の有効性を検証している。ピムは、翻訳の発生史的・系譜学的記述の必要性を説き、ジュネットは書籍の現象形態を構成する諸要素の分析を重視している。ジュネットのテキスト理論はオリジナル作品を中心に展開されているが、翻訳テキストの分析にも有効であることをめぐる欧米における議論を紹介している。また、受容史の文脈のなかで演劇上演を考察するには、芸術性の高い上演と商業劇場における上演を等価に記述する方法が求められる点を強調している。第４章では、モルナール作品の日本における受容について統計に基づいた概観を提供している。いつ、誰が、何を、どのような言語から翻訳したかについて、データに基づく複数のグラフを作成し、特に戦前と戦後の受容の差異が明らかにされている。統計的分析とともに、日本とハンガリーの政治的・社会的関係の変化、日本の文学・演劇潮流、翻訳者の渡航可能性などの歴史的環境分析を遂行している。このような分析を通して、モルナールの作品のなかで、翻訳と上演の二つの領域に渡って最も積極的に受容された作品が『リリオム』であることを抽出している。第５章、第６章で、日本における『リリオム』の翻訳及び演劇上演による受容の様態が集中的に分析されている。第５章の翻訳分析においては、翻訳が読者に提供される書籍形態を構成する要素（ペリテキスト要素）として、著者および翻訳者の表記の変化、表紙の構成の変遷（図版の使用の有無など）、表題に見られる映画メディアの影響、翻訳者の前書き・後書きの機能に焦点を当てている。特に、翻訳者の前書き・後書きの変遷を通して、原語であるハンガリー語からの翻訳の進展に関連して、ハンガリー文学史の記述を含めた学術性の高まりを跡付けている。第６章では、『リリオム』の日本における演劇上演について、築地小劇場などの芸術志向の強い劇団による上演と、榎本健一や宝塚歌劇団の商業劇場における上演を等価にみる記述方法を取り、モルナール受容のすそ野の広さを明らかにしている。第６章第６節では、『リリオム』のストーリに基づく二度の映画化の試み（伊丹万作と榎本健一）も紹介している。受容の裾野の広さに関連して、補填では、『りぼん』『ひまわり』『女学生の友』における漫画・絵本による『リリオム』受容の様態についても詳しく紹介している。さらに、本論文の付録に、「日本におけるモルナール作品の翻訳

リスト」と「日本における『リリオム』の上演リスト」が加えられている。

５　論文の特質

モルナールの作品は文学ばかりでなく演劇・映画を含む多様なメディアを通して受容されており、このような複合メディア性を示す優れた事例としてモルナール受容は欧米において優れた研究成果を生み出している。日本における受容も同じように広範な領域に及んでいるが、その受容の様相に関する研究はほとんど皆無という状況にある。本論文は、研究上のこの欠落を補うとともに、欧米のモルナール受容に関する研究動向との連携を求めて英文で執筆しており、その成果は国際的な議論の対象となり得る。受容史と翻訳を結び付ける方法として、最先端のアンソニー・ピムの翻訳論を取り上げ、『リリオム』の受容の様態をジェラール・ジュネットの最新のテキスト理論を駆使して記述している点は高く評価できる。附録１として掲載されている「日本におけるモルナール作品の翻訳リスト」は、翻訳の系譜学をめぐるピムの議論を踏まえ、同一翻訳の再版に関する情報さらに原テキストの言語情報を含めることによって、それ自体が優れた受容史記述の水準に達しており、付録２の「日本における『リリオム』の上演リスト」とともに、本論文をモルナールの日本受容史に関する基本文献にしている。

６　論文の評価

上記の論文の特質は、本論文が評価されるべき事項でもある。本論文は英文で執筆されており、国際的作家であるモルナールに関する欧米の研究史のなかに、日本おけるモルナール受容というテーマ域の存在を刻印するものである。特に、散在しているモルナール受容の様態を留める上演プログラム等の資料を収集し、丹念に分析した成果を一覧にまとめ上げた英文リストは、海外の研究者に日本のモルナール受容史の系譜と多様性を示す優れたプレゼンテーションであり、極めて重要な成果である。それらは、今後のモルナールをめぐる国際的研究に大きく寄与する基礎データとみなすことができる。本論文における翻訳分析は、アンソニー・ピムとジェラール・ジュネットの方法に依拠しており、最新の翻訳理論、テキスト理論に接近する積極性は高く評価できるが、それぞれの理論の紹介・記述に際して、生成の背景を含めたより厚みのある説明が求められる。しかし、このことは本論文の成果にたいする評価を低めるものではない。

７　論文の判定

本学位請求論文は，文学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり，本学学位規程の手続きに従い，審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので，博士（文学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以　上